

2017年06月20日(火)【外為Lab】松田哲

タイトル:【アウフヘーベン(止揚)】

小池都知事が、豊洲問題で、「アウフヘーベン」という言葉を用いました。

それで、「アウフヘーベン」をテーマに記述します。

「アウフヘーベン」とは、日本語では、「止揚(しよう)」と翻訳されている哲学用語です。

その意味は、あい矛盾する事柄を、より高い次元で、どちらも生かすこと。

矛盾する諸要素を、より高い段階で、発展的に統合すること。

世の中には、一見すると矛盾しているのですが、よく考えると、矛盾していないことに気が付く事柄(事象)があります。

あるいは、真実なのだけれど、その真実に従っていると、なかなか旨味が受け取れない事柄もあります。

例えば、「ふぐ」には「毒」があります。

「だから、食べない方が良い。」

そういった対応、対処法は、正しい、と言えるでしょう。

「リスク」を避けるといった便法としては、最善の策です。

「ふぐ」を食べなければ、「ふぐの毒」にあたる可能性は無いのですから、リスクは「ゼロ」です。

しかし、「ふぐ」は美味しいのです。

そこで、人間は考えます。

その「ふぐの毒」を除去して食べれば良い、と。

そうやって、日本人は「ふぐ」を食してきました。

長い歴史の間に、「ふぐ」のどこに「毒」があるのかを研究して、調理法を工夫した人がいたはずです。

きっと、その中には、そういった調理法を研究しているときに、「ふぐの毒」を食してしまい、貴重な犠牲者となった料理人もいることでしょう。

もちろん、現代は、特別な免許がなければ、「ふぐ」を料理してはいけませんが、そういった「法律」とか、「免許」といった制度がない時代から、日本人は「ふぐ」を食してきました。

豊臣秀吉が、朝鮮征伐を行なった際に、九州で「ふぐ」を食べるのを禁止した話が残っています。

このことから、当時の人々が「ふぐ」を食べていたことがわかります。

「ふぐ」を食べて死んだ人が多かったので、禁止令が出たはずだからです。

地元の人たちは、調理法を知っていますが、九州に、遠方から集合した武士たちの中には、
「死ぬこともあるまい」
と考えて、あるいは、
「必ずしも、あたるとは限らない」
と考えて、
「そんなに美味しいのなら食べてみよう」
といった人も多かったのでしょう。

私が、ここで、何を言いたいのか、というと、「美味しいもの」を食べるにも、「食べ方がある」、ということです。

外国為替取引（FX取引）には、キャピタル・ゲインという「旨味」があります。

ところが、損をして「元本自体が減る」という「リスク」もあります。

このことは、裏返せば、「元本自体が増える」という「リスク」も内包しています。

どういうことかということ、F X取引で、外貨買いをした場合、外貨価格が上昇すればキャピタル・ゲイン（利益）、外貨価格が下落すればキャピタル・ロス（損失）になります。

逆に、F X取引で、外貨売りをした場合は、外貨価格が上昇すればキャピタル・ロス（損失）、外貨価格が下落すればキャピタル・ゲイン（利益）になります。

このリスクは、マーケット（外国為替市場・F X市場）が、どのような状況になっても存在し続けているのです。

過去数年の間、金利差を狙った取引（売買）が横行しましたが、もともと金利差を目的とした外貨投資は、一概には、勧めることができません。

現在は、通貨間での金利差が縮小したので、大きくは話題になりませんが、ドル金利が上昇すれば、いずれ復活の兆しが見えることになるのだろう、と考えます。

しかし、金利差を狙った取引は、止めた方が良い、と考えています。

外国為替市場には、トレンドがありますから、金利が高い通貨であっても、その価値が上昇することがあり、金利差を享受しながら、「為替差益」をもダブルで享受できる場合があります。

それは否定しませんが、そういったラッキーな時期がある、というだけのことです。

そこに主眼を置いたF X取引は、やめた方が良い、としか言えません。

外国為替取引は、金利差を狙うのではなく、「キャピタル・ゲイン（為替差益）」を狙うこと、——つまり、トレンドを狙うこと——で、利益に結びけるべきだ、と考えています。

つまり、実は、金利差は、「おまけ」に過ぎません。

認識としては、「金利差を享受できれば、なおラッキー」といった程度のことなのです。

金利差を狙った取引は、未来永劫うまくいくというわけではありません。

うまくいく時期がある、ということです。

これからも、また金利差を狙った取引が行われ、それが失敗に終わることを繰り返すこと
でしょう。

しかし、外国為替取引は、金利差を狙うのではなく、「キャピタル・ゲイン（為替差益）」
を狙うこと、——つまり、トレンドを狙うこと——を目的とすれば、外貨投資を行なう際
に、その外貨の価値（価格）が下落する場合でも、利益を追求できることになります。

つまり、「リスク」を「リターン（利益）」にかえる発想です。

こういった事柄は、「アウフヘーベン」をしないと、「単なる矛盾」「単なる詭弁」にしか聞
こえないことかもしれません。

+++++

（2017年06月20日東京時間15：00記述）